



建学の精神

世はあげて神を畏れ、自然を愛せと叫んでいます。畏敬の心と自然理解認識を教育の基礎とする姿勢が強く語られています。

何かしら学院の精神そのものが世に認められたように思われます。それは教える者も、また学ぶ者も、共に共通の理解の場がある、即ち、人間的に恐れるものは何もないということです。ただありますのは、上の人も下の人、先生も生徒も、「神さまを畏れる」ということだけです。キリスト教のまことの心は、各人がそれぞれかけがえのない人格を与えられていることを知り、自分を大切にすることです。自分自身を大切にすることは同時に、他の人に対する尊敬の念となって表われます。この相互に尊敬し合うという交わりの場に、もし人間を恐れるという感情が入りますならば、真の交わりは望めなくなります。

個人と集団を生かすのは、人間を恐れず神を畏れる心、神への畏敬の精神を持つことでもあります。神への謙遜の心をもって、栄えあるこの尊い交わりを完成したい。これが私たちの熱き念願であります。



八代学院 校章・マーク
「十字架」を中心に、「国際」「神戸」の語感から海と海をイメージしたコンパスをデザインし、安定感のある正三角形を基本に、上昇と未来への志向を表わしています。

学校法人 八代学院

〒658-0032 兵庫県神戸市東灘区向洋町中9-1-6

TEL : 078-845-3222 FAX : 078-845-3211



創立

八代学院高等学校(現・神戸国際大学付属高等学校)は、日本聖公会主座主教八代斌助によって設立されました。

八代は、1962年(昭和37)ごろから高等学校進学希望者が激増したことにより、既存校の定員では受け入れが困難であることに心を痛めました。加えて、今日までの日本の高等学校教育の体制そのものに満足できないとして、寄宿舎を併設した独自の高等学校を設立して、「全生活的教育」を工夫して実現したいと考えました。それには現代の臨床心理学、社会心理学、相談心理学などの成果を、大いに活用すべき、と提唱しました。

海外親善の旅から戻った八代が著した数冊の著作に関心を寄せた三笠の宮と親交を得たことにより、1951年(昭和26)10月の松蔭短期大学校舎の定礎式に三笠の宮が臨席し、オリンピア幼稚園、山手小学校をも視察。八代学院構想の端緒となったのは、このときに岸田幸雄兵庫県知事、原口忠次郎神戸市長らとの談話の中で「次は男子の学校をつくりたい」と話したときといえます。八代はまた、この構想は日本聖公会における〈キリスト教信仰より引き起こされる教育観〉であると記しました。そのため当初の計画から、将来展望として各方面の教育的、宗教的、福祉的活動としての幼児教育、大学教育をも視野に入れていました。

校地となったのは、八代が既に1951年(昭和26)取得していた神戸市垂水区の山地でした。八代は自ら勤労奉仕団を組織し、この電気も水道もない未開の山を開拓。酪農と農業を営みながら、朝夕祈りに包まれた生活を送る〈聖公会センター〉をつくり、イギリス・ケラム神学院の創設者ケリー神父の志にならい、聖使修士会神戸修道院を設置していました。聖公会センターと聖使修士会神戸修道院は、残念ながら現存していませんが、八代は、八代学院のみならず、キリスト教精神に基づき、日本の未来を担う青少年の教育のために骨身を削って働きました。

1992年(平成4)国際化時代の到来をふまえ、使命と地域性、歴史性を明確にするために、1968年(昭和43)開学した八代学院大学は、〈神戸国際大学〉に校名を変更しています。

創立の背景と歴史

神戸国際大学附属高校の創立者である八代斌助は、北海道の函館で生まれました。父 欽之充は秋田県の出身で、北海道勇払郡鶴川村へ小学校の校長として赴任しましたが、長女が川で溺れた際に、我が子を助けながら、長女を助けるために川に飛び込んだ少女を救うことができなかったことから、聖公会の教会を訪ね、入信。聖職につきました。開拓地北海道で異国の宗教であるキリスト教牧師の家庭は、極貧を強いられたといい、八代は小さいときから身体を使って労働をし、家計を助けていました。また、相撲部屋からスカウトされたほどの体躯と強腕の持ち主だったそうです。

やがて北海道にも近代化の波が押し寄せ、階級闘争が激しさを増す中、「社会悪というのは革命ではない。一人ひとりの人間の心の友として生きることが、社会悪をなくする道だ」と確信を深めます。父の勧めもあって、函館の聖ヨハネ教会に伊藤松太郎司祭を訪ね、CMSの寮に入り、ラング師の強い推薦により、東京の立教大学予科に入学。ハーバート・ハミルトン・ケリーの「キリスト教は宗教ではない、福音である」という言葉に強く惹かれました。

在学中に母が逝去。貧しさ故に助けることができなかったという悔いから、立教を中退し、家計を助けるために少しでもお金を稼ぎたいという思いで、中国・山東省青島に向かいます。しかし現実は一層厳しく、疲れ果て、絶望した八代が教会で祈っているとき、エドワードという信徒と出会い、1年間、無牧の教会の管理を託されました。青島から帰国する道中、旭川駅で陸軍歩兵連隊志願兵募集の看板を目にして入隊。八代の青春は、まさに波瀾万丈だったのです。

一年間勤務して故郷の釧路に戻ると、欽之充が高知転任になっており、八代も同行することになりました。高知へ向かう旅の途中、神戸でフォス主教に会ったことで予定を変更し、神戸教区に籍籍。1922年(大正11)神戸教区姫路顕栄教会に伝道師補として勤務します。

フォス主教が引退後、その後任としてジョン・バジル・シン普森が来日。1927年(昭和2)八代はシン普森によって司祭に叙任されました。実はシン普森を推薦したのは立教時代に感銘を受けたケリーで、シン普森は帰国したケリーが設立したケラム神学校へ八代を留学させました。

1929年(昭和4)留学から帰った八代は、神戸の須磨聖ヨハネ教会に、1931年(昭和6)からは神戸教区聖ミカエル教会に招聘され、1939年(昭和14)シン普森の跡を継いで主教に聖別されました。

戦時中、軍部や政府の圧力で日本聖公会が日本基督教団への合同を強要された際に、迫害に耐えて日本聖公会を守ったことは有名です。戦後は1948年(昭和23)連合軍総司令官マッカーサー元帥の特別許可を得て、戦後初の公式海外渡航民間人として、世界レベルの国際会議に出席しました。その際、当時のイギリス国王ジョージ6世に昭和天皇のメッセー ジを手渡すなど、民間大使として活躍しました。またエキュメニカル(教会再一致運動)を推進し、1972年(昭和47)大阪万博でキリスト教館の館長を務めています。

文書伝道にも非常に積極的で、月刊の個人雑誌『ミカエルの友』を書き続けました。また、自ら奇峰社を設立して、キリスト教関係の出版に従事、多くの図書を刊行しています。



創立者 八代斌助
やしろ ひんすけ (1900~1970年)
世俗的な庶民性を身につけた、型破りな性格で、東奔西走の働きで「世界のヤシロ」と呼ばれました。

